

終戦から65年目を迎えて

8月15日の終戦記念日にあわせ、全国各地で戦争のことや本当の平和とは何かについて考える場が多く持たれます。町では旧両町の意思を継承し平成20年度に「核兵器廃絶平和の町」宣言を行いました。平和を望む取り組みは平和教育事業（授業や派遣事業）としても行っています。

広島・平和記念式典派遣事業

北海道でも連日猛暑の続く中、8月5日広島に向けて6名の児童が派遣されました。参加者は出発の事前研修で派遣事業の目的や意味についてを考え、学校のみんなで折った千羽鶴と一緒に式典に臨みました。

教科書が「戦争について」教える文字や写真は子ども達にとつては歴史上のできごとになりつつありますが、この貴重な体験学習の成果は、とても大きなものであります。



出発前に参加者6名と撮った記念撮影

派遣事業の目的は

- 戦争の悲惨さを肌で感じ、平和について考える。
- 将来の安全と平和のためのリーダー的人材を育成する。
- 皆さんへ「伝え・広め・一緒に考える」

※事業の「伝える目的」の一部ではありますが広報で紹介します。

広島の日

8月6日

広島平和記念式典参列 → 平原さんとの碑めぐり → 塩治さんの被爆体験談
→ 広島平和祈念資料館見学 → 灯ろう流し



今回の式典は65年の節目に加えて大きな動きのあった式典でした。

核廃絶の動きとして原爆投下の当事国である米国の駐日大使が初めて広島・平和記念式典に参加し、英仏代表と国連事務総長も初参列をしました。

核廃絶への機運が高まる一方で北朝鮮やイラン、テロリストへの核拡散の脅威が高まる中、核大国と「核廃絶」という共通の目標で接点を持つことができた式典の意義は大きいと思います。



して活動をしています。

爆撃機B29から投下された原子爆弾が一瞬にして多くの命を奪った惨劇を説明してくれました。

「平和記念公園が観光地として見られるのはいやなんです。お墓が観光地なんて変でしょ」といっていた平原さんは両親が被爆者の2世として生まれ、2度と同じ過ちを繰り返さないようにという思いで現地で碑めぐりガイドと



「原爆が落ちたときは人が死んでいて当たり前の状況だった」と話してくれた塩治さん。5歳のときの被爆体

験談は当時の様子を聴く貴重な機会になりました。妹が原爆の後遺症で亡くなったことや、戦後の服装や食料などの日常の様子も、とても悲しくつらい内容のお話しでした。

子どもたちがここで聴いたことは、強く印象に残り報告会ではそれぞれの感じたことを発表していました。